

羅針盤

札幌東商業高校進路通信
平成 28 年 10 月 5 日
札東商進路指導部発行

貧困問題を考える②

前回の続きです。前回の終わりに、「5年間の契約が切れる時には40歳目前」という一文がありました。契約社員の契約期間は最長5年です。同じ職場に5年間しか働けません。5年たったなら、また次の職場を探さなければならないのです（少し前の国会で決まりました）。前職の経験や持っている資格によって多少考慮されますが、雇用条件はほとんど変わりません。キャリアアップはしません。いくつになっても給料は上がりません。ボーナスも出ません。

「好きなこと」「やりたいこと」にこだわり非正規労働を続けるか、貧困にならないために、しっかりとした雇用条件の仕事に就くか。みんなはどのように考えますか？

私は「年収200万円は非正規の平均で決して珍しい例ではなく、むしろ一般的。40歳で異業種に転職しても、おそらく賃金は似たり寄ったり」「学芸員の資格を取得しても雇用は少ない。貧困から抜け出すキッカケにはならない可能性が高いのでは？」と伝えた。谷村さんは“やっぱり”という表情になってため息をつく。

「悩んでしまうのは、あと何年でクビという不安から逃れたいから。ひとり暮らしで貯金がゼロなので、働き続けないとホームレスになっちゃいます。だから、本当に、働ける期限があるのは怖い。やっぱり正社員として働きたいって思う。きっと、自分にもそういう働き方ができるというかすかな希望を持っています。あとは世の中にはボーナスがあると聞きます。もし、ボーナスをもらえるような職に就けたら、もっと人間らしい生活ができるのかなとか」

どうして、ただただまじめに勤労する女性が苦しむのか。単身で暮らす20～64歳の女性の3人に1人（32%）が貧困状態にある（国立社会保障・人口問題研究所）。さらに65歳以上の単身女性になると47%と過半数に迫る勢いとなっている。



さらに公共機関で働く彼女は、残酷なほどの正規非正規格差の渦中にいる。全産業での正規職員の平均賃金は321万1000円（平成27年賃金構造基本調査統計）と比べると約6割の収入しかない。さらに職場の同僚にいる正規の地方公務員と比べると、正規は平均年収669万6464円（平成26年地方公務員給与実態調査）と好待遇で、非正規の賃金は正規の3分の1にも満たない。

努力や自身の成長、仕事の成果ではどうにもならない絵に描いたような官製貧困、官製格差だ。貧困から抜けて、普通の生活をするためには学芸員の資格取得ではなく、ダブルワークをして長時間労働によって差額を埋めていくしかない。実際に同じような官製貧困に悩む、介護職の女性たちのダブルワークは常識で、その一部は性風俗に流れている。

低賃金や格差の現実で精神的に追い詰められ、悩み、身動きが取れなくなるのは谷村さんのような、よりまじめな一般女性たちだ。いったい、どうしてそうってしまったのか。

新卒入社会社では長時間労働の末、倒れた

両親と妹は父親のリストラを機に地元の北海道に帰り、谷村さんは社会人1年目からひとり暮らしを始めた。中堅大学の文学部を卒業して、IT系の中小企業に就職する。

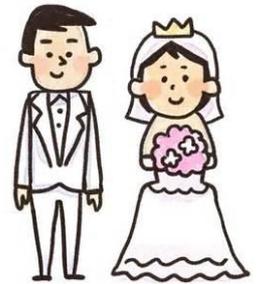
「新卒入社の子社は 5 年聞ほど勤めました。残業は月 100 時間ぐらゐあつたけど、残業代は出ました。なので、手取り 25 万円は超えてゐました。実は、お酒飲むのが好きで、その時代はよく友達と飲みに行つたりした。すごく忙しかつたけど、自分のこれまでを振り返ると、いろいろ友達もいたし、当時がいちばん普通の生活だつたなつて。そのような普通の生活ができたのは、当時だけ。結局、**残業代はたくさんもらつてゐたけど、長時間労働の過労で倒れて体調を崩しました。**精神科では抗うつ神経症つて診断されて、働けなくなりました。両親のいる実家に帰つて、しばらく休んでから大学時代に取つた図書館司書の資格を生かそうと図書館に勤めた。今と同じ嘱託職員で、手取りは 12 万円程度でした」

実家から図書館に勤めてゐた頃は、手取り 12 万円の貧乏だつた。貧乏ながら好きな本を買う、買い物する、友達と遊ぶ、休日に問題意識のある障害者分野のボランティアに行く、といふことはできた。貧乏の領域を超えて、貧困になつたのは図書館勤務を継続したいと、都内に引越してひとり暮らしを始めてから。**最低限の衣食住で可処分所得は消え、一切の遊びや余暇活動ができなくなつた。**昔のように友達と会うこともなくなり、自宅で独り悩む時間が増えた。

「結婚や出産は、収入がある人の特権」

飛行機代がなく、実家に帰れないといふ谷村さん。高度経済成長以降の日本は、結婚前提、企業を通じて妻や子どもに再分配される制度設計だつた。

労働者派遣法改正による非正規化の影響によつて、多くの労働者は収入が下がり、世帯主の収入だけでは生活を支えられなくなつたのが現在だ。そして**女性の単身世帯は 3 人に 1 人が貧困**といふ、壮絶な貧困社会に突入した。



「結婚すれば、生活が変わるみたいなことはよく言われてゐますが、非正規で低収入な自分にまったく自信がないし、誰かが見初めてくれるとはとても思えない。やっぱり結婚とか出産は、普通以上の収入がある人の特権といふか、自分にかかわることとはとても思えないです」うつむきながら、悲観的なことを語り出した。



「うちの図書館、一緒に働く 3~4 割くらいが正規の公務員の方々です。正規の方々が職場で話してゐることつて買い物とか旅行とか、子どもの教育とか、そういう話。正規でちゃんとしたお給料があつて、家族で暮らしてゐる人たちは、子どもにたくさん習い事をさせて、年に何度か海外旅行に行くんだ……つて。何か別世界といふか。私は飛行機代がなく、今の職場で働き出してから一度も実家には帰れてゐないのに。この差つて、何なのでしょう？ 仕事をまじめにやつてゐるだけではダメなのでしょう。正直、ずっとすごく苦しいです」

安倍政権は「働き方改革」「一億総活躍」などの指標を立て、さらなる女性の社会進出を後押ししようとしてゐる。しかし、**全雇用者の 4 割を占める非正規職員や、貧困に近い状態の生活を強られる非正規女性たちが、自分の力だけでその苦しい状態から抜け出せる道はほとんど用意されてゐない。**それだけでなく、彼女がかかわる公共事業は民営化や非正規化による予算削減で、ギリギリの生活の現状維持すらできない状態だ。

谷村さんは貧困状態の現状維持すら否定される中で、かすかな希望をもつて今日も学芸員の資格取得の勉強をする。